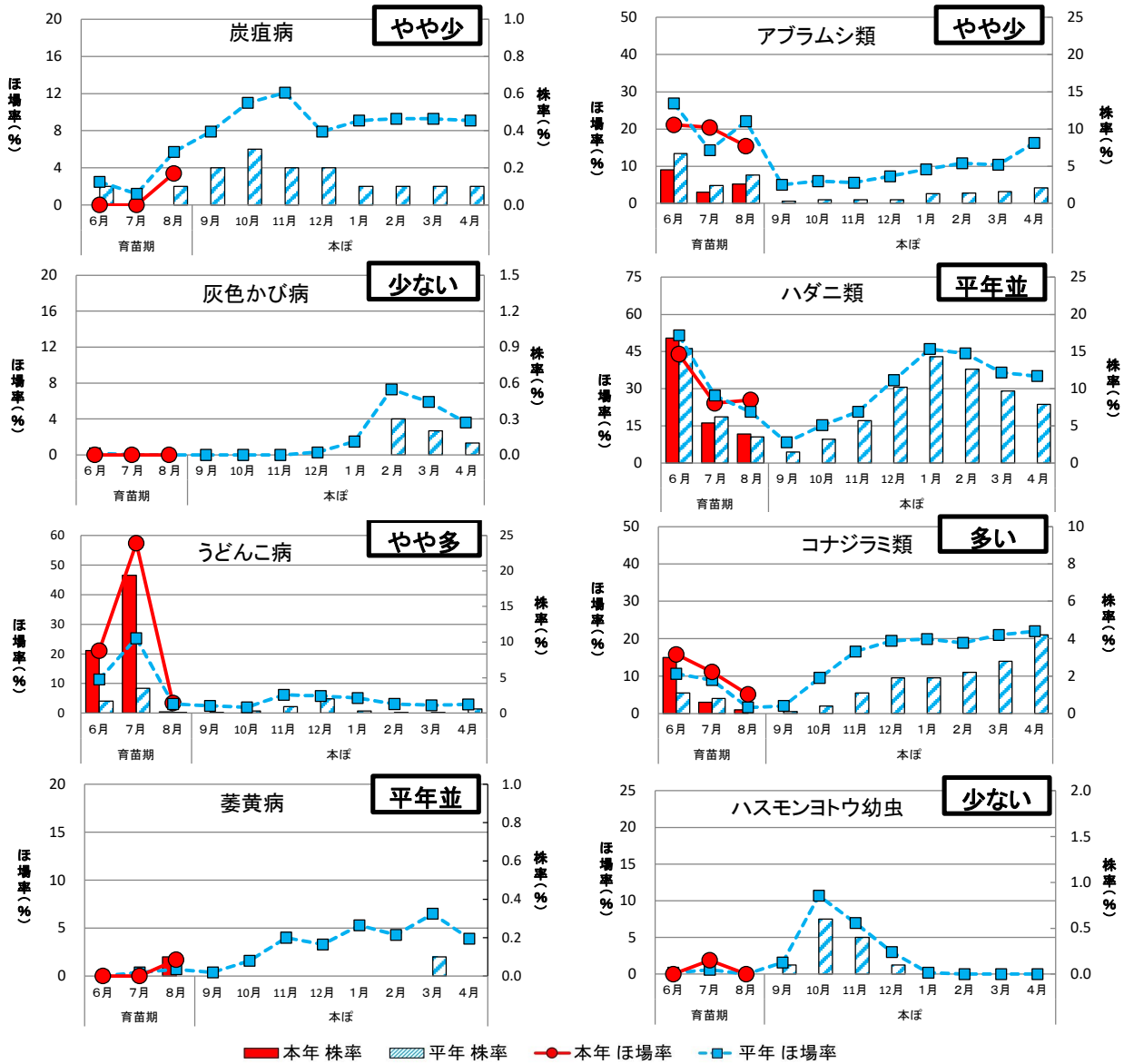


いちご病害虫情報第 3 号 (8 月)

栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数 : 59 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%) : 発生株数 / 調査ほ場数 × 25株 ※ほ場率(%) : 発生が確認されたほ場数 / 調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー 炭疽病・萎黄病・うどんこ病 (定植前の防除) ー

炭疽病や萎黄病は苗不足の原因となるなど、被害の大きな病害です。また、うどんこ病は育苗期から発生が多く、本ぽでの防除に苦慮する事例も増加しています。適切に防除し、被害を防ぎましょう。

- 炭疽病の孢子飛散を防ぐため、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水のはね返りのない方法でかん水を行う。
- 炭疽病・うどんこ病については、本ぽへの罹病株の持ち込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 炭疽病・萎黄病ともに、発病株や周辺株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理(罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する)後に処分する。

■ 今月のトピックス ハスモンヨトウ

生態と被害について

ハスモンヨトウは、いちごの葉や果実を食害し被害を与えます。毛に覆われた卵塊（写真1）が葉裏に産み付けられ、孵化した幼虫は、若齢のうちは集団で葉を食害し（写真1）、不整形でカスリ状の食痕（写真2）をつくります。中・老齢になると分散し隣接する株なども旺盛に食害します（写真3、4）。昼間は地際や日陰にいることが多く、主に夜間に活動します。25℃のとき幼虫期間は14日程度で、土中での蛹を経て成虫になります。露地では越冬できませんが施設内では冬季も生存可能です。

防除対策について

- 1 ほ場周辺の雑草は発生源となるため、除草を行う。
- 2 成虫の侵入を阻止するため、施設の開口部や出入り口に防虫ネット（目合4mm）を展張する。
- 3 ほ場内をこまめに観察し早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。施設のパイプにも産卵するので注意する。
- 4 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫時に薬剤防除を行う。
- 5 粒剤・灌注剤（ベリマークSC（IRACコード：28）等）を処理して防除する。



写真1 葉裏の卵塊と若齢幼虫の集団



写真2 若齢幼虫による食痕



写真3 中齢幼虫と食痕



写真4 老齢幼虫

詳細は、農業総合研究センター防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。
病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、
[農業総合研究センターホームページ](#)でもご覧いただけます。

